すが、はからずもデビュー曲となった「時雨の宿」は、自分なりにテーマを決めて書いた作品だったのです。ある日、雑誌「太陽」を見ていたら、作家の立原正秋の散歩道というのが掲載されていて、木漏れ日がステキだなと思いました。これと、当時読んでいた中里恒子「時雨の記」の世界を合体させて書いたのが「時雨の宿」です。作詞をするときはとても集中するので、家族に話かけられるのもイヤ。目玉だって動かしたくないぐらいです（笑）。少しでも動くと、頭の中から構想が逃げそうで…。

◆「さよならは言わない」は新人賞受賞後の懇親会がきっかけ

第30回日本作詩大賞最優秀新人賞を受賞後、作詞教室があり、講師の海野洋司先生と親しくお話をさせていただく機会がありました。その時、私が高知学芸高校出身であることなどをお話するうちに、上海列車事故の話になり、海野先生が「あの事故がとても悼ましく、詩を書いたんだ」とおっしゃるのです。思わず「見せてください」と懇願したところ、海野先生は「じゃあ紺野さん、君が君の思いを加えて歌詞にしてみなさい」と、話が進み、次に講師の深野義和先生が作曲して完成しました。

そして、私の2つめの受賞曲、「よさこい鳴子踊り」のレコーディング風景が高知新聞に掲載されることになって、「さよならは言わない」の話も出たんですね。この記事を目にしたご遺族の方から、高知新聞を通じて「聴かせてください」と依頼があり、そこから本格的に合唱曲のアレンジをしてもらって、追悼会でお披露目となりました。その後、ラジオ番組で紹介される機会もあり、関東支部の同窓会総会では15回目から歌い継がれています。「悲しい詞にはメジャーなメロディーを」と、二人の先生のこだわりのおかげで、素晴らしい曲になったと思います。

◆高校を卒業した後、東京で警官になりました！

振り返ってみると、なんだかフラフラした人生だったなと思います。今は作詩家ですが、高校を卒業してから、実は警官になったのです。卒業間際、父の結核が悪化して進学が厳しい状況となり、また「不良になった少年たちを救いたい」との正義感に燃えて、東京で婦人警官となりました。でも、安保闘争などで新宿西口のデモの警備に行くことも多く、自分の職業に疑問を抱いてしまったんですね。それで、「また高知に帰って大

さよならは言わない
（上海列車事故を悼む歌）

作詞 海野洋司・紺野あずさ　作曲 深野義和

灰色の霧の大地に　夢冷たく切り裂けて
友よ あなたたちはどこに 晴れた故郷の空が見えますか
あの明るい笑顔はいまどこに あのいつもの足音も聞こえない
頬の涙さえ いつか乾いて 姿探した日
友よ あなたたちはどこに 晴れた故郷の 空が見えますか

哀しみの河を渡れば またしずかに日が昇る
友よ さよならは言わない 君はこの胸に いつも生きている
あの明るい笑顔を思い出す あのいつもの足音が聞こえるよ
さあ あたらしい日々を歩こう 君といつまでも
友よ さよならは言わない 君はこの胸に いつも生きている

あの明るい笑顔を思い出す あのいつもの足音が聞こえるよ
さあ あたらしい日々を歩こう 君といつまでも
友よ さよならは言わない 君はこの胸に いつも生きている
友よ さよならは言わない 君はこの胸に いつも生きている
いつまでも いつまでも

婦警時代。上野公園に開設された迷い子相談所で、子供たちのお世話をしていました。

20歳のとき
道に迷ってました。

インタビュアーは國藤直子（16期）。偶然、共通の知人がいたことで、一気に話が盛り上がった。

学に入り直そう」と、大学受験。高知大学も高知女子大学も受かっていたのですが、学費が貯められなくて断念。そんなあやふやな時期に出会ったのが、詩人の高田敏子さん主宰の詩誌「野火」だったのです。その後、同人誌に少年問題をテーマにした作品を投稿したり、よい経験だったなと今では思います。

◆長く歌い続けられるヒット曲が欲しいです。合唱曲でも！

ヒット曲にはエピソードがつきものですが、なかでも、作詞家の星野哲郎先生の『昔の名前で出ています』のエピソードは忘れられません。ある夜、星野先生が飲んでいたバーに、知り合いのホステスさんから電話がかかってきた。「私よ」という声に「ああ、君か」と答えてしまったため、星野先生は名前を訊ねられなくなってしまい、「今はなんて名前で出ているんだい？」と聞くと、「新宿のときと同じよ」と答えたとのこと。このやりとりをメモしておいたことから、あの大ヒット曲が生まれたそうなんです（笑）。私も、合唱曲を含めて、長く人に歌い継がれるヒット曲が欲しいですね。

◆学芸高校時代はテニスに明け暮れる日々。真っ黒でした！

インターハイ出場。毎日の練習の成果？際立つ色の黒さ（右側）

テニスは中学から続けていたので、高校でも迷いなくテニス部に。思い出すのは、1年生の夏にいきなり3年生とペアを組んで、インターハイに出たこと。まぐれで（笑）2回戦に勝ったんですよ！　そのおかげか、四国大会にも出る資格を与えられたのですが、期末試験と重なって、辞退してしまったのは今から思うと残念ですね。テニスを始めたきっかけは、美智子妃殿下のテニスブームに触発された父から「これからの女性はテニスだ」と、勧められたから。実際は美智子妃のような優雅さとはほど遠く、「イ〇ドの烏」とからかわれるほど、真っ黒でした（笑）。

◆国語が大好き！　なかでも漢字のテストが得意でした

高校時代は本当にテニスに夢中で、勉強のほうは今では忘却のかなた（笑）。でも、国語と生物は好きで、得意だったのは漢字のテスト。いつも上位に名前を連ねていたのが誇れるぐらいでしょうか。

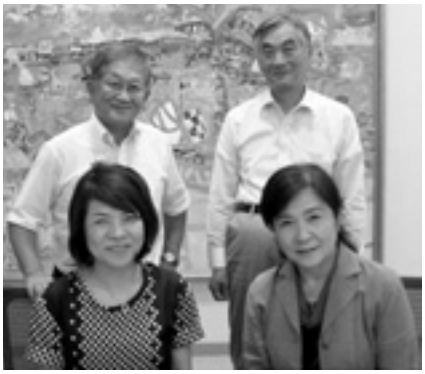
学芸を受けようと思ったのは、制服がかわいいな、と思ったから。それに、学校説明会にいらしていた3人の先生方が若くて、はつらつとしたイメージがあったから。私は6期なので、学芸もできたばかりでとても明るい雰囲気だったの。T高校と進路を迷っていたけれど、こちらは「わが校は伝統もあり？」と、かなり年配の先生でしたので、断然学芸のほうが魅力的に思えました。学校のイメージは重要です。今後の学校説明会も、ぜひ参考にしてくださいね（笑）。

◆本気で向き合い、本気で努力すれば、夢は必ず叶います

挫折しながら生きてきましたので、上から目線で言うつもりはありませんが、私が大切にしている4つのことを最後にご紹介したいと思います。「4つの格言」としてまとめましたが、まず私がいちばん大切にしているのが「好きなこと」です。幼いころから本を読むのが好きだった私は、その後、詩と出会い、そして歌詞を紡ぎ出す詩人になりました。職業としてずっと続けてこられたのは、とにかく「好き」だから。「得意なもの」では、自分より上手な人を見ると、めげてしまうかもしれないけれど、「好き」なら、人のことは気にならないで続けられます。

とはいえ、具体的な目標設定は必要です。「〇〇までに、〇〇を到達する」など、できるだけ具体的に目標を掲げて努力することが重要です。本気で願い、本気で努力すれば、必ず思いが叶います。

そして、運！　私は大切な節目のよいタイミングで、その世界で名を成した人との出会いがありました。強く願えば、運を引き寄せることができるのです。たとえ間違った選択をしてもいくらでも軌道修正はできます。道はあちこちに開けています。「好きなこと」を追求して、実りある人生を！


取材後に記念撮影。前列右から紺野あずささん（6期）、國藤直子（16期）。後列右から石川明男（6期）、岡本洋（8期）

紺野あずささんによる4つの格言

1．好きなことをする
2．持続する
3．具体的な目標を持つ
4．運を引き寄せる

各期の声

茶の心

塩見（和喰）久惠（2期）
裏千家　塩見 宗久

利休居士の教えに『茶は服のときように点（た）て、炭は湯の沸くように置き、花は野の花のように活け、夏は涼しく、冬暖かに、降らずとも傘の用意、相客に心せよ、刻限は早めに』という七則があります。この七則とともに、四規という茶道の精神を表現したのが「和敬静寂」という言葉です。和し合い。敬い合い、そして清らかな心を持ってものに動じない信念をつくる。簡単に言えばこれにつきますが、なかなかに実行するのはむつかしく、努力ばかりです。

また、戦争を体験された八九歳の鵬雲斎大宗匠は丸い小さな茶碗の中の緑のお茶を皆でいただくことこそ、世界平和に通じると『一盌からピースフルネスを』と世界を駆け回っています。頭が下がります。

私は生徒に茶道はおもてなしの心を養い、自分の体に色々の知識を蓄え、自分を磨くためのものだから、お茶を習っている事はすぐにはわからないけれど、その人の立ち居振る舞いを見るとすぐにわかるから、人前に出ても大丈夫、自信を持っていきなさいと教えています。そして禅語の「看脚下（みよきゃっか）」を大事にしています。つまり真実ははるか彼方にあるものでなく、日常の中にあり、真実の自己を見落としてはならないという事です。自分の足下を見据えて立っている人は、どんな事があってもふらつく事はないという意味です。

茶道は軸（禅語）、焼物、漆器、季節の菓子、花、歴史など、本当に奥が深く勉強する事ばかり心も体もリラックスできます。まぁ、とにかく『一服』することにより、『間』ができ、どうか一期一会を大切にして、穏やかな日々を過ごして欲しいと思います。私も残りの人生をのんびり、ゆったりお茶を楽しみたいと思っています。

好天に恵まれた4月29日、神奈川県茅ヶ崎の又隠（ゆういん）写しの茶室で生徒達が、私の古希と教授拝受の祝いの茶会を催してくれました。

楽しい一日でした。　　合掌

茅ヶ崎　松籟庵にて　（塩見さんは前列中央）

4度目で四国制覇

瀬戸口（松崎）要子（10期）

私ごとながら、今年2月より3度目の単身赴任で、徳島人となり徳島文理大学看護学科で学生たちに高齢者看護を教えています。後輩を自分たちの手で教育・育成することは、自分の経験を次の世代に伝えられるやりがいのある仕事です。今時の新しいことは学生たちに教えてもらいながら忙しい毎日を過ごしています。

ところでこれで四国は4度目となりました。最初はもちろん、生まれてから高知学芸高校を卒業し、上京するまでの18年と数ヶ月の高知暮らし。2度目は香川（高松）での暮らし。転勤で再度、東京暮らしになって8年の後、またまた転勤で3度目の四国は愛媛（松山）と香川（高松）。そして東京に戻ったのですが、今回4度目はついにこれまでご縁のなかった徳

徳島文理大のキャンパスで（中央が瀬戸口教授）

島に単身赴任となりました。これで四国4県を制覇したことになります。

4県を回ってみると確かに深山に隔てられた4つの県は気候風土も人々の言葉、人柄もそれぞれに異なることを実感します。異なってはいますが、四国の人々は総じて優しく穏やかです。そしていつ帰っても四国は青い海と山が懐深く迎えてくれます。高知ではまぶしく光る太平洋と陽光に照らされて輝く四国山地。香川では暗い陰影の阿讃山脈とまぶしく光る瀬戸の島々。松山ではやはり山側が南、海側が北になるので石鎚山系は少し暗くなり、海に沈む夕日がとても大きいことに感激しました。徳島…南と北に山、西から四国三郎の吉野川が悠然と流れ、東に海…という地形。高知のはりまや橋近くで育った私には眉山は筆山に、紀伊水道に注ぐ吉野川は浦戸湾に注ぐ鏡川に似て見えてしまいます。徳島の方には申し訳ないですね。

歳とともにふるさとが懐かしくなっているのかもしれません。なかなか高知に帰って余生を楽しむ…ことにはならないのですが。今回、4度目の四国でようやく人並みに四国遍路を回り始めました。

10期生も今年は62歳。同級生のほとんどは定年退職をして、悠々自適に暮らしているようです。徳島に来られることがありましたらお声がけください。札所巡り（1～3番くらい）、大塚国際美術館など徳島の見所にご案内いたします。

高知での田舎暮らし

吉川 裕三（25期）
（本山支局？より）

今年3月に東京を離れ、高知に戻りました。世間的には田舎暮らしとでもいうのでしょうか。今回は、この紙面をお借りして長岡郡本山町での田舎暮らしの一端を紹介させて頂きます。

田舎暮らしというものは、一日何もしなければ、時間だけが過ぎていきますので、毎日の日課を決めて生活を始めました。

まず、ウォーキング。3月下旬から始めました。最初はグランドの周囲を5kmほど歩いていましたが、グランドでは、景色に変化がなく面白くないので、旧道沿いに5km歩くことから始めました。現在では雨が降らない限りは、毎日10km程度のウォーキングをしています。おかげでウエストが5cmほど締り、入らなかったパンツが入るようになりました。体重にも少しずつ変化が出始めています。

朝もやの汗見川（吉野川支流）

次に家庭菜園。東京にいた頃は、ベランダを利用した緑のカーテンで朝顔を植えたり、観葉植物を育てたりしていましたが、今年はミニトマトを作ってみました。プランター4つに4種類の苗を合計8株。順調に生育してこの夏トマトを買う必要がない程になりました。またトマトは、脇芽をこまめに取ると聞いたので脇芽を取り、捨てるのはもったいないので挿し木にするとそれも大きくなり、来年も今年のトマト栽培で学んだことを活かしていきたいと思っています。

将来的にやろうと思っていたお遍路さん、いわゆる四国八十八か所巡りをやっています。自家用車で自宅から日帰りで巡る行程を立てて月に1度くらいのペースで巡っています。徳島から始まり、薬王寺を過ぎて甲浦そして室戸の最御崎寺へと入り、高知県の各寺を巡りました。お寺を巡ることはもちろんですが、高知県各地に学芸の同窓生の出身地があります。金剛頂寺は26期の坂井君の実家だったとか。田野町は、岸野先輩・浜宇津君の実家とか。おおよそ30年ぶりに見る高知県下は、平成の大合併で市町村名が変わり多少の違和感もありますが、県下を巡るのは遍路とは別の意味で楽しい旅でした。

高知での田舎暮らしは、都会と違う意味で楽しい部分もあります。

最後に25期の皆さん。同窓会関東支部の総会に出席して、同窓生の皆さんと懐かしい話題を共有してみるのは如何でしょうか？

オリンピックのメダルを夢見て

坂東　真夕子（37期）

今も柔道の練習で汗を流しています。

１９９１年４月、私は学芸中学に入学しました。入学と同時に、子供の頃からの夢であったオリンピックを目指し、柔道部に入部しました。以後、１９９６年３月に高校を卒業するまでの６年間、私は「柔道漬け」の日々を過ごすこととなります。

当時の柔道部は門田幸延先生のご指導のもと、中学校高校ともに四国の中でも一目置かれる存在でした。まったくの素人から柔道を始めた私でしたが、そんな環境の中で揉まれ、中学３年生で全国中学校柔道大会女子個人戦準優勝、高校２年生では全国高等学校柔道選手権大会女子個人戦で準優勝という成績を収めることができました。大学は横浜国大に進学し、大学３年生の時に全日本学生選手権の52kg級で優勝し、悲願であった全国の個人タイトルを手にすることができました。また、その年にプラハで行なわれた世界学生柔道選手権大会では準優勝することもでき、大学卒業後は実業団で約４年半オリンピックを目指し競技を続けましたが、結局「２００４年のアテネオリンピック出場」という夢を叶えることはできず、27歳で学芸から始まった競技生活にピリオドを打ちました。

競技生活を改めて振り返ると、嬉しいことや楽しいことよりも、辛く苦しいことの方が断然多かったです。だからこそ、今も柔道を通じて培ってきたこと、学んできたことは私の心の糧として強く心に根ざしています。

世界学生柔道選手権大会で準優勝
1998年プラハ（チェコ）

学芸で過ごした日々が私の人生の礎を作ったと言っても過言ではありません。今回、「あさかぜ」に寄稿するにあたり、学芸での６年間を懐かしく思い起こすと共に、多くの人に支えられながら、素晴らしい競技生活を送れたことに改めて感謝しています。

高知―仙台の繋がり

田所　裕康（42期）

我々42期生も卒業後10年以上が経過しました。その間、同窓会幹事としてこれまで３回同窓会を開催してきました。

私自身は東北大学で博士取得までの９年間に加えて、研究員として１年間東京生活を挟んだ後、再び仙台に戻り仙台在住期間が合計10年を越えました。駆け出しの研究者ですが「オーロラ等の自然現象をテーマとした地球・惑星研究」を行っています。東日本大震災は、仙台生活の中でも特に大きな出来事で、仙台で出会った多くの知人・友人が被災しました。ライフラインのない中で知人・友人の助けを得ながら、改めて人との繋がりの大切さを感じました。そのため今回は、主に仙台生活中に経験した人との繋がりの中で、高知県や学芸との繋がりに関して羅列していきたいと思います。

東北大学へは42期生は私も含めて４人もの（？）人数が進学し大学院生活を含めた６年間を共に過ごしました。その後、私のみが博士課程に進学したのですが、その頃から仙台在住学芸卒の学生数名と定期的に杯を交わす機会を得ました。これは仙台という高知県人と出会う機会の少ない土地だからこそ出来た事ではないかと思っております。

学生時代より趣味でテニス、剣道（中高時代剣道部で大学時代は軽く運動程度）、英会話、よさこい等を行ってきました。特によさこいは、10月にみちのくＹＯＳＡＫＯＩ祭りが仙台で開催されており、高知県文化の広がりを感じる事ができます。また私が現在所属している東北のよさこいチームでは、（昨年は震災の影響で不参加でしたが）毎年高知でよさこいに